

協伸商会穀物レポート [KKR] Vol. 025

(2020/21年度 USDA 米国農務省 8月12日発表)

[ハイライト] ①新年度の世界穀物需給見通しは5月以来触れてるようにコーン/大豆を筆頭に生産/消費/貿易量とも前年から拡大し多くは史上最高の数値を示しており、今回もUDSA見通しに大きな変化はなく波瀾のない平穏な状況である。②その背景にあるのは、各国とも7月末の作況指数が一部を除けば好調で大きな波乱が見当たらず、2013年以来8年連続の豊作の可能性が高まっており穀物全体で27.3億ト(前年比+2.4%)、大豆は3.7億ト(同+9.8%)と合計すれば31億トという歴史的な数字を達成しそうである。米国主要18州では7/20現在作況指数は「優」「良」合せて69%と昨年同期57%を大きく上回っている。③マーケットも供給が全体的に潤沢なことから、各品目とも押しなべて低位安定であり、8月第一週シカゴ終値は小麦は5ドルを割り\$4.96/bu、コーンは昨年同期より1ドル近く低い\$3.08/bu、大豆は昨年同期より若干上回っているが9ドルを切って\$8.70/buと世界的な早魃に襲われた2012年に比べればおよそ半値のレベルであり、ある意味面白みのない展開である。④しかしながら、何の不安もなくこのまま2020/2021穀物年度は順調にいくのだろうか?新型コロナに端を発する景気後退、サバクトビバッタによる作物被害、中国の長江流域の大洪水、欧州早魃、ASF(アフリカ豚熱)の再発、アマゾン森林火災、その他気候動による予測外の大災害による減収等、微妙な自然バランスの上に立つ農業を巡る環境変化は即収穫に影響することに常に留意する必要がある。⑤中国税関発表によれば同国大豆の上半期(1-6月)輸入数量は4,504万トと前年比17.7%増、うちBRAは3,255万ト(+19.2%)と米国の924万トを大きく上回っている。また、BRA開発商工省によると7月の同国の穀物輸出数量は大豆1,037万ト、コーン415万ト、計1,453万トと5か月連続で前年を上回り好調である。

1、世界穀物需給の概要(大豆除く)

- ① 生産量: 2,731百万ト(前年比2.5%増、前月比±0)
- ② 消費量: 2,704百万ト(前年比2.0%増、前月比±0)
- ③ 貿易量: 453百万ト(前年比3.4%増、前月比0.1%増)

2、とうもろこし

- ① 生産量: 1,171百万ト(前年比5.3%増、前月比0.1%増)
- ② 消費量: 1,164百万ト(前年比3.9%増、前月比±0)
- ③ 貿易量: 185百万ト(前年比7.9%増、前月比1.2%増)
- ④ 概況: 世界生産量は米国単収が史上最高となり前年比5.3%増と史上最高の見通し。BRAも107百万トと史上最高の勢いである。消費面では新型コロナによる景気後退等の不確定要因がある。

価格は\$3.08/Bu(前年\$4.00/Bu、前月\$3.43/Bu)と前月比¢35下落した。

3、小麦

- ① 生産量: 766百万ト(前年比0.3%増、前月比0.4%減)
- ② 消費量: 750百万ト(前年比0.4%増、前月比0.2%減)
- ③ 貿易量: 188百万ト(前年比1.1%減、前月比±0)
- ④ 概況: 世界生産量はEU/米国等における冬小麦減産はあったが豪州/ロシア等の増産もあり史上最高となる見通し。消費量も中国/インド等で増加し市場最高となる見込み。貿易量も伸びており前年並みとなる見通し。

価格は\$4.96/Bu(前年\$4.91/Bu、前月\$4.90/Bu)と前月比¢6上昇した。

4、大豆

- ① 生産量: 370百万ト(前年比9.8%増、前月比2.2%増)
- ② 消費量: 368百万ト(前年比4.5%増、前月比1.2%増)
- ③ 貿易量: 165百万ト(前年比0.5%増、前月比2.4%増)
- ④ 概況: 前月同様、生産量は米国の生産回復(97⇒120百万ト)とBRAの増産(124⇒131百万ト)等による史上最高の見通しは変わらず。注目の中国輸入見通しは99百万トと前年89百万トから大幅増。一方、米中貿易の「第一段階合意」により農業分野は今年125億ドル、来年195億ドル、合計320億ドルの増加としていたが米中対立激化から不透明感が漂う。

価格は\$8.70/Bu(前年\$8.50/Bu、前月\$8.93/Bu)と前月比¢23下落した。

世界の穀物・大豆等の需給

2020年8月13日
米国農務省発表： 単位100万トン

主要穀物世界の需給							
		生産量	総供給量	貿易量	総使用量	期末在庫量	
全穀物	2018/19	2,625	3,448	429	2,640	808	
	2019/20	2,666	3,474	438	2,650	824	
	2020/21	7月	2,730	3,551	451	2,704	847
		8月	2,731	3,554	453	2,704	850
小麦	2018/19	731	1,019	174	735	284	
	2019/20	764	1,048	190	747	301	
	2020/21	7月	769	1,066	188	752	315
		8月	766	1,067	188	750	317
粗粒穀物 (とうもろこし等) 注1	2018/19	1,397	1,768	212	1,421	347	
	2019/20	1,406	1,753	207	1,412	341	
	2020/21	7月	1,458	1,800	218	1,454	347
		8月	1,465	1,806	221	1,457	348
大豆	2018/19	360	459	148	346	113	
	2019/20	337	450	165	354	96	
	2020/21	7月	363	462	162	364	99
		8月	370	466	165	368	98

世界のとうもろこし需給							
		期首在庫	生産量	輸入量	国内計	輸出量	期末在庫量
世界計	7月	311.95	1,163.21	176.86	1,160.12	182.45	315.04
	8月	311.30	1,171.03	178.94	1,164.87	184.66	317.46
アメリカ	7月	57.10	381.02	0.64	316.88	54.61	67.26
	8月	56.59	388.08	0.64	318.79	56.52	70.01
アルゼンチン	7月	1.87	50.00	0.01	15.00	34.00	2.88
	8月	1.87	50.00	0.01	15.00	34.00	2.88
ブラジル	7月	5.49	107.00	1.50	68.00	38.00	7.99
	8月	5.49	107.00	1.50	68.00	38.00	7.99
EU	7月	7.23	68.30	23.00	87.00	4.20	7.33
	8月	7.23	67.80	25.00	89.00	3.70	7.33
日本	7月	1.44	0.00	16.00	16.00	0.00	1.45
	8月	1.44	0.00	16.00	16.00	0.00	1.45
中国	7月	204.07	260.00	7.00	277.00	0.02	194.05
	8月	204.07	260.00	7.00	277.00	0.02	194.05
ウクライナ、 ロシア	7月	1.54	54.30	0.06	16.00	37.40	2.49
	8月	1.75	54.80	0.06	16.20	37.90	2.50

世界の大豆需給							
		期首在庫	生産量	輸入量	国内計	輸出量	期末在庫量
世界計	7月	99.67	362.52	158.02	363.56	161.58	95.08
	8月	95.85	370.40	162.49	367.90	165.49	95.36
アメリカ	7月	16.87	112.54	0.41	62.46	55.79	11.56
	8月	16.73	120.42	0.41	63.14	57.83	16.59
アルゼンチン	7月	26.00	53.50	3.60	50.20	6.50	26.40
	8月	25.70	53.50	4.00	50.20	7.50	25.50
ブラジル	7月	22.77	131.00	0.15	47.65	83.00	23.27
	8月	19.10	131.00	0.15	47.25	84.00	19.00
中国	7月	27.25	17.50	96.00	113.40	0.10	27.25
	8月	27.26	17.50	99.00	116.40	0.10	27.26
EU	7月	1.63	2.60	14.90	17.36	0.20	1.57
	8月	1.98	2.75	14.90	17.43	0.20	2.00

世界の小麦需給							
		期首在庫	生産量	輸入量	国内計	輸出量	期末在庫量
世界計	7月	297.12	769.31	183.27	751.59	188.04	314.84
	8月	300.91	766.03	183.73	750.14	187.99	316.79
アメリカ	7月	28.41	49.63	3.81	30.35	25.86	25.65
	8月	28.41	50.01	3.54	30.24	26.54	25.19
アルゼンチン	7月	1.69	21.00	0.01	6.20	14.50	2.00
	8月	1.69	20.50	0.01	6.20	14.00	1.99
オーストラリア	7月	3.54	26.00	0.20	7.05	17.50	5.19
	8月	3.49	26.00	0.20	7.00	17.50	5.19
カナダ	7月	5.46	34.00	0.45	9.80	24.50	5.61
	8月	5.26	34.00	0.45	9.70	24.50	5.51
EU	7月	11.82	139.50	5.50	118.30	27.00	11.52
	8月	15.36	135.50	5.50	117.30	25.50	13.56
中国	7月	151.16	136.00	6.00	130.00	1.00	162.16
	8月	151.68	136.00	6.00	130.00	1.00	162.68
インド	7月	24.00	107.18	0.03	99.50	1.00	30.71
	8月	24.00	107.18	0.03	99.50	1.00	30.71
ロシア	7月	7.28	76.50	0.50	40.50	36.00	7.78
	8月	7.48	78.00	0.50	40.50	37.50	7.98
ウクライナ	7月	1.25	26.50	0.08	8.80	17.50	1.52
	8月	1.16	27.00	0.08	8.60	18.00	1.63

脚注1：粗粒穀物はとうもろこし、マイロ、大麦、燕麦、ライ麦等の計で約80%がとうもろこしである。

脚注2：年度は穀物年度。地域・作物により異なる。例：アメリカ産とうもろこし、大豆：9月～8月。

脚注3：ウクライナ、ロシアは両国の合計。

躍進する世界の穀物生産/輸出大国ブラジルの現状と課題(1)

- ①周知の通り、近年の穀物生産/輸出におけるブラジルの躍進ぶりはすさまじい。いまや、ブラジルは中国/米国に次ぐ**世界第三位の穀物生産大国**であり、輸出においては昨年初めて米国を追い抜き**世界一の立場を確保した**。2000年以降、この20年間の世界の穀物生産/消費と輸出入の**拡大のテンポは歴史上今だかつてない速さ**であり、国家としてその生産と消費拡大の両極を担ったのは紛れもないブラジルと中国であると言っても過言ではない。
- その意味で、先月までの6回にわたる中国特集に続き今月からはブラジル特集としてその生態系、農業の歴史、生産基盤、地域特性、生産組織、内陸物流、アマゾン河川物流開発、メジャーの存在、農業政策と金融制度、食肉産業等々についてふれて行きたい。ある意味、この国は大河アマゾンの如く**手が付け所のないほど多様・複雑怪奇・捕捉不能な国**でもある。
- ②改めてブラジルを見渡すと、その国土の広大さと農業の多様性には驚かされる。その**多様性を生み出す源泉は、その国土の立地条件**ではないだろうか。今注目の**Jared Diamond**風によれば「人類の歴史的発展の違いはその立地条件によって決められた」にも通じるかも知れない。ブラジルの地球上の位置は地球儀を眺めれば一目瞭然、南北は赤道直下～から南緯30度、東西は西経35度～70度の**大アマゾンとブラジル高原**からなる851万平方キロ(日本の約23倍)、世界第5位の広大な面積。【別図1】「ブラジルの生態系区分」にあるように北はアマゾン熱帯雨林から南は大西洋沿岸森林まで全国6区分と極めて広域。そこで生産されるものは、**世界トップクラスの生産量と輸出量を誇る**。伝統的作物であるサトウキビ/コーヒー/キャッサバ/フェイジョン(マメ)/タバコ/綿花等、新品目である大豆/とうもろこし/オレンジ等と肉畜製品…と多様である。
- ③また【別表1】「ブラジルの概況」に整理したが、国土と人口の巨大さに加え、経済的には高い失業率(11.9%)と1990年代の年率4桁を超える物価上昇、為替のレアル安等の問題は抱えているが現在はGDPは世界9位(一人あたりは77位と低い)と一定の存在感を示している。貿易関係は、輸出では今回のメインテーマである大豆を含めた一次産品が全体の約半分、輸入では工業原材料が約6割近くを占めやや**モノカルチャー的色彩が強い**。貿易相手国では**輸出入とも中国が1/4を上回る数字**を挙げて断トツトップ。この関係がブラジルを世界最大の穀物輸出国にのし上げた最大の要因であることは間違いない。人種的に欧州系48%、混血43%とあるように欧州系と黒人/先住民/東洋系などとの交じりあい(混血)が半分近くまで進んでいるのがブラジルの多様性を生み出している一因かも知れない。その点、同じ移民国でありながら余り交じり合わない米国とは様子が異なる。
- ④ブラジル農業の歴史を見ると、それは1500年のポルトガル人ペドロ・カブラルによるブラジル「発見」と共に始まったがその中心を担った**2大品目はサトウキビ(砂糖)とコーヒーの生産**である。まずサトウキビは、1530年代サンパウロ周辺でサトウキビ農園と製糖工場が設立されると瞬間に**黒人奴隷労働によるプランテーション栽培**がブラジル北東部ペルナンブコまで一気に拡大、ヨーロッパの砂糖需要を大いに開拓し1620年代まで約**100年の繁栄**が続いた。その後、イギリス/フランスがカリブ海/キューバに進出しサトウキビのプランテーションが拡大したことによりブラジルの独占的地位は薄らいだが、18世紀半ばまで同国の輸出額の約半分を占めると同時に、現在でも同国農業生産額の16.3%(2016)、世界生産量シェア21.9%を占め大豆に次ぐ存在となっている。
- ⑤その後、1727年ブラジル北部のパラに初めてコーヒーが持ち込まれ1760年に入りリオデジャネロ/サンパウロで本格的生産、近郊の広大な土地と気候風土に恵まれた「ミナス・ジュライス地区」で急速に拡大した。**コーヒーは19世紀初頭までにブラジルの主要輸出品に変貌**、「コーヒーブルジョアジー」の登場も相次ぎ、**19世紀は「コーヒーの世紀」と**まで言われるまでにその存在感は高まった。しかし、1920年代ラテンアメリカ全体でコーヒー過剰生産に陥り、1929年大恐慌で大暴落した。この中で同国は、国家経済の維持と外貨獲得のためには農業セクターの保護を優先し**保護主義的政策**として1931年「**国家コーヒー委員会(CNC)**」を設立した。これが現在まで連なる農業政策の基本となり、**農産物と鉄鉱石輸出等の一次産業に頼り工業化が進まないブラジル経済の現状に繋がっている(後述)**。現在コーヒーは同国農業生産額の6.7%で第4位、世界生産シェアは35.9%と依然存在感は高い。

【別図1】 ブラジルの生態系区分

※資料：ブラジルチリ統計院 (IBGE)



生態系	総面積 (km ²)	国土面積に占める割合
アマゾン熱帯雨林	4,196,943	49.29%
セラード	2,036,448	23.92%
マッタ・アトランチカ (大西洋沿岸部森林)	1,110,182	13.04%
カーチング半乾燥地帯	844,453	9.92%
パンパ高原	176,496	2.07%
パンタナル湿地帯	150,355	1.76%
ブラジル国土面積	8,514,877	100.00%

【別表1】 ブラジルの概況

※数字は2018年実績

1.国土面積	851.2万平方キロ (世界5位)	
2.人口	2億947万人 (世界5位)	
3.GDP	1兆8850億ドル (世界9位) 一人当9,060ドル	
4.通貨	レアル(1ドル=5.5レアル)	
5.宗教	カソリック (65%) プロテスタント (22%)	
6.人種	欧州系 (48%) 混血 (43%) アフリカ系 (8%)	
7.貿易品目	●輸出	①一次産品49.7% (大豆/鉄鉱石/原油等) \$2254億
	●輸入	①原材料57.9% (工業原料/輸送用機器等) \$1774億
8.相手国	●輸出	①中国26.8% ②米国12.0% ③ARG6.2% ④オランダ5.4% ⑤日本1.8%
	●輸入	①中国26.8% ②米国12.0% ③ARG6.1% ④ドイツ5.8% ⑤日本2.4%